

## 第一章 おやさま (1)

「教典のススメ - 教えを心の拠り所に -」 口上謹夫

## はじめに

はいよいよこれから第一章「おやさま」の解説に入ります。

私たちは何を説明するにしても、最初に誰が始めたのか、ということを明確にしないと、先には進めないものです。

お道の場合、それは言うまでもなく、教祖です。教祖の話をもぎに、お道の教えを説くことはできません。

教典においても、第一章「おやさま」というタイトルから分かる通り、まず教祖のお立場についてふれています。

## 教祖のお立場

- |                       |            |          |
|-----------------------|------------|----------|
| ① 「月日のやしろ」<br>(神のやしろ) | ② 「ひながたの親」 | ③ 「存命の理」 |
|-----------------------|------------|----------|

本日は、その1つ目の「月日のやしろ」ということに焦点をあてて話をしていきます。

## 01. 月日のやしろ

第一章「おやさま」の冒頭は、次のお言葉によって始まります。

「我は元の神・実の神である。この屋敷にいんねんあり。このたび、世界一れつをたすけるために天降つた。みきを神のやしろに貰い受けたい。」

これは、江戸時代末期の天保9年(1838年)10月、教祖のお口を通して伝えられた親神様の初めてのお言葉です。このお言葉の中に、肝心要の教理がすべて含まれています。

## お言葉の意味

「元の神」：人間世界をお創めになった神ということ。

「実の神」：世界においては火、水、風、人間の身の内(身体)においては温み、水気、息一すじをはじめとして、一切万事の守護をしている神ということ。

「この屋敷」：現在の天理教教会本部の神殿があるところです。

そこに人間宿し込みの元なるぢばがあり、かんろだいが据え置かれています。そのような「いんねん」のある場所なのです。

「このたび」：旬刻限(特別な時)が到来したことを意味します。

これは第三章「元の理」のところで学ぶのですが、この世元はじまりに、一番初めにお産みおろしになった子数の年限、つまり九億九万九千九百九十九年という年限のたったその時が、いま到来したということ。

「世界一れつ(世界中の人々)をたすけるために天降つた」：どんな身上の悩み(病気)や事情のもつれも解決する方向へと導き、その根本にある心をおたすけいただく。そして世界を陽気ぐらしへと立て替えていく。そのために親神様がこの世に天降つたとの仰せです。

「みき」：教祖のこと。この世元はじまりの母親の魂をお持ちであり、世界中どこを探しても、このお方一人より他にはない。

「神のやしろに貰い受けたい」：ふつう社は木で作られ、ご神体として祀られていますが、教祖の場合は、教祖ご自身を「神のやしろ」に貰い受けたいとのこと。親神様は、天にては、月日として現れておられるので、「月日のやしろ」ともいいます。

以上が、冒頭の一節を簡潔にまとめた説明です。さらにもっと説明を加えていこうとすると、いくらでも膨らんでゆくように思います。それはこの一節が、教えの主要な部分だからでしょう。

## 02. 立教の元一日

夫の善兵衛は当初お断りしますが、夜昼通して3日間の神人問答を経て、10月26日の夜の明ける午前8時ごろ、善兵衛はあらゆる人間思案を断ち、堅い決心のもと、「みきを差し上げます」とお受けになって、教祖は「神のやしろ」にお定まりくださいました。これが天理教の立教の元一日(第一日目)なのです。

すなわちそれは、人間の都合も、全て捨て去って、世界の人々を残すことなくたすけあげたいという、親神様のお心ひとすじに添い切ることでありました。



Happistで  
読むことができます!



## 第2回 教典って何？(2)

「教典のススメ - 教えを心の拠り所に -」 口上 謹夫

このように、その神一条のあり方は、教祖のひながたの 50 年の一番はじめにはっきりと示されているのです。

のちに教祖は、みずから筆をとって「おふでさき」を記されました。そこには、教祖が「月日のやしる」であることを終始一貫、繰り返し述べられています。たとえば、

いまなるの月日のをもう事なるわ くちわにんけん心月日や (12号 67)  
しかときけくち八月日がみなかりて 心八月日みなかしている (12号 68)

という歌があります。教典はもちろんのこと、教祖伝にも、別席のお話にも引用されています。教祖のお立場がとても分かりやすいお歌だからだと思います。現代語訳をすると以下ようになります。

いま、月日(親神様のこと)が思っているのは、教祖の口は、人間の形をしているが、心は月日そのものである。  
その教祖の口を月日が借りて、ものを言っている。教祖には、月日の心そのものを貸している。

つまり、月日(親神様)の心そのものが教祖に入り込んでいるとの仰せです。「月日のやしる」たる教祖のお立場が明確に教えられています。教祖を通して、私たちは親神様の親心を知ることができるといえるでしょう。

今回は、「ひながたの親」「存命の理」という教祖のお立場についてお話を進めていきます。

### 今回の語り合いテーマ

グループを作って、次のような話をしてみましょう。

心の中で自分自身に問いかけてみるのも良いかもしれません。

① 教祖のお立場について学んだことを、友人・知人と共有しましょう。

② 親神様のことを「元の神・実の神」ともいいます。いったい、どういう意味でしょうか。

③ 親神様の親心とは、どのようなものだと思いますか。



Happistでも  
読むことができます!

